地獄絵と文学

——絵解きの世界——

石破洋／著

地獄絵と文学

――絵解きの世界――

石破　洋著

教育出版センター

＜著者略歴＞

石破　洋（いしば・ひろし）

1943年，鳥取県船岡町生まれ。金沢大学大学院修了後，鹿児島女子大学文学部助教授を経て，現在島根県立島根女子短期大学教授。島根大学非常勤講師。

著書『説話と説話文学』，『説話文学の世界』，『仏教文学の世界』，『百人一首自立語索引』，『島取県船岡町の方言』など。

現住所　鳥取県船岡町見槻中77—4

古典選書 12

地獄絵と文学——絵解きの世界——

平成四年十一月十日　発行

定価二八〇〇円（本体二七一八円）

著者　石破　洋

発行者　柴崎芳夫

発行所　株式会社　教育出版センター

〒101　東京都千代田区神田神保町二—四六

電話　〇三（三二三九）五四三八

印刷所　株式会社　興英文化社

©Hiroshi Ishiba　1992

Printed in Japan

ISBN 4-7632-1216-8 C3091

目次

地獄絵と文学
——西行の連作「地獄ゑを見て」を中心に——　3
地獄絵と説経師　31
冥界への旅
——「死出の山」と「三途の川」をめぐって——　52
わが国における十王経
——奪衣婆の所伝を中心に——　85
中国における目連救母説話の変容　98
わが国における目連救母説話の変容　137
目連説話における目連救母経の意義について　177

『もくれんのさうし』の誕生
——わが国における目連救母説話の母胎について——　198
初出一覧　224

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

地獄絵と文学

——西行の連作「地獄ゑを見て」を中心に——

一

わが国における地獄絵の最古の実例は、東大寺二月堂本尊金銅十一面観音光背の裏面にある毛彫三界九地図最下層に線刻されている絵[1]とされている。しかし、これは幾つかの火炎の中に亡者が描かれ、その周りに獄卒が立つ図柄であって極めて素朴のものにすぎないのである[2]。また、万葉集には、

相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後に額づくがごと

池田朝臣の、大神朝臣奥守を嗤ふ歌一首（池田朝臣は名忘失せり）

寺寺の女餓鬼申さく大神の男餓鬼賜りて其の子生まはむ[3]

と見え、「大寺」すなわち大安寺をはじめとする諸寺院に餓鬼像が存在していた。景戒の日本霊異記

によれば、河内国の沙弥尼が六道を図して平群の山寺に安置したというが、[4]その図様の程は知れない。

とまれ、二月堂の毛彫図にせよ万葉集にせよ単純素朴で、後の地獄変の如き恐怖感はなく、万葉歌に至っては全く諧謔歌にすぎないのであって、上代人にとっては地獄は未だ切実なものとはなっていないようである。

上代人の信仰は、後に神道と名付けられる信仰を基盤としていたが、それは一口に言えば自然崇拝で、彼らの冥界は古事記に見える「根国」・「黄泉国」のような、蛆・蛇・呉公・蜂・鼠・虱などのいる何やら暗い地下界であった。かようの素朴な冥界観は地獄に対する上代人の素朴な意識とよく見合うものと言えるであろう。

平安時代における地獄絵の遺品は、中尊寺紺紙金泥一切経の見返絵に見えるものが唯一のものとされ、家永三郎氏は大般若経巻五・巻四〇・巻六三の図を指摘され、[5]更に秋山光和氏は巻七二の見返図も附加された。[6]

地獄絵に関する最古の資料は、貞観一八年（八七六）鴨川の東、吉田寺の後壁に地獄絵があり、その罪人受苦の図を見て尊意は忽ち遊楽の心を捨てて入山の志を発したという日本高僧伝要文抄（第二、尊意贈僧正）の記事である。[7]この話は中国僧静藹が「地獄図変」を見て出家した話を想起せしめる。[8]

吉田寺がいつ創建されたかは不明であるが、この附近は京都における無常所として古くから死者が埋葬されていたから、吉田寺に地獄絵が存したのは、蓋し、ふさわしいと言うべきであろう。

平安時代の絵師巨勢広高は長保頃（九九九―一〇〇四）の人と言われ、中国の張孝師・呉道玄にも

比すべき、わが国地獄絵師の第一人者で、今昔物語集（巻三一の四）[9]や巨勢氏系図[10]に東山の長楽寺に籠って後壁に地獄を描いたことが見え[11]、弁乳母集には十斎堂の地獄絵のことが見えている[12]。

中国唐代と同じく、わが平安時代にも京洛の寺院に地獄変壁画の存したことが知れるが、壁画のみならず地獄変屏風も行われたのである。すなわち、政事要略所引の蔵人式[13]・北山抄[14]・御堂関白記[15]・枕草子[16]・栄花物語[17]・年中行事秘抄[18]・春記[19]・江談抄（第二）[20]・雲図抄[21]・天承元年記[22]・兵範記[23]・兵範記裏書文書[24]・吉記[25]などの記事によって、仏名会には地獄変屏風をたてることが例となっていたことがわかる。また、壁画や屏風絵のみならず、地獄（極楽）図や十界図・十王図の掛幅、画巻も後には生まれた。

二

仏教が渡来し、わが国に拡まって行った時、衆庶の心に最も強烈鮮明のイメージを与えたものは、恐らくは地獄の思想であったろう。中国では、静藹は地獄変を見て忽ち出家し[26]、呉道子の地獄変は長安人士の身の毛をよだたしめ、人々は罪を懼れ、善を修し、魚や肉を食べなくなったというが[27]、実情はわが国でも相似ていたのである。

地獄思想を更に浸透せしめる契機となったのは源信の往生要集であった。本書の影響がいかに大であったかは言うまでもないが、概に示した如く諸書には夙に地獄絵のことが見えているのであって、往生要集を受容すべき基盤は充分に存したと言ってよい。

とまれ、地獄絵を見ることによって、それまでに読み或いは聞いて有していたであろう地獄のイメージに、より一層鮮明な刺激を与えられたことは確実で、例えば赤染衛門はそれを、

地こくゑに、人を、はかりにかけたる所をみて
つみは世におもき物そときゝしかといとかはかりはおもはさりしを[28]

と言って驚いている。しかしながら、菅原道雅女が、

地獄のかた書きたるを見て
みつせ川渡るみざをもなかりけり何に衣をぬぎてかく覧[29]

と詠み、和泉式部が、

地獄の絵に剣のえだに人のつらぬかれたるをみてよめる
浅ましや剣の枝の撓むまでこは何のみのなれるなるらむ[30]

と歌い、弁乳母が、

同じ宮程なく失せさせ給ひて御忌に姫宮の御まへ御堂におはしましゝに十さいたうの地獄のゑを人々よむに十八日つるぎに人の貫ぬかれたるを
いかにせむ剣の枝の撓む迄重きは罪のなれる也けり[31]
絵に死出の山に鬼に追はれて女のなきてこゆるありし
作りこし罪を共にて知る人もなく〳〵越ゆるしでの山哉[32]

などと詠んだのをみると、ただ単に絵様を述べたにすぎない感があるのであって、就中、道雅女の作

は一種遊戯的の気配すら漂う。ここに於て、弁乳母が、

同じ宮程なく失せさせ給ひての御忌に姫宮の御まへ御堂におはしましゝに十さいたうの地獄のゑを人々よむに十八日つるぎに人の貫ぬかれたるを

と詞書したのは重要な意味を持ってくる。大串純夫氏によれば、「宮」は中宮妍子、「姫宮」は妍子の娘禎子内親王、「御堂」は法成寺の阿弥陀堂で、従って「十さいたう」は法成寺の十斎堂であろうという。[33]

十斎とは、毎月一・八・十四・十五・十八・二十三・二十四・二十八・二十九・三十の十日間、種々の仏菩薩の像の前で斎戒読経すれば、死後、地獄の苦しみを免れるというもので、中国では唐末から行われ、わが国では藤原期以降に流行した。

弁乳母の詞書に見える「十八日」は、敦煌本「地蔵菩薩十斎日」に、

十八日閻羅王下念観世音菩薩不堕剣樹地獄持斎除罪九十劫[34]

とあり、わが古今著聞集（巻二、釈教第二）には、

右来十八日、於二焔魔庁一以二十万人之持経者一、可レ被レ転二読十万部法華経一。宜レ被二参勤一者。[35]

と見え、簾中抄（下、仏寺）にも十斎日を説明して、

○十八日　観世音芹を念すれハ九千劫のつみを滅す。……如此罪滅して地こくにおとし給はす[36]

などとあるように、十八日は閻魔の日であった。もっとも、後には「ゑんまの斎日」は十六日とされ、[37]東都歳事記によれば、諸寺に閻魔・脱衣婆・十王・倶生神などの木像石像が作られ、「十王像地獄の

画幅を掛」け、「ゑんま参り」が盛んに行われたのである。(38)

とまれ、敦煌本によって明らかなごとく、十八日の部分には閻魔王、剣樹地獄が描かれていたものと考えてよい。弁乳母の詞書の「十八日」はかような意味を有しているのであって、臆説を述べれば、各自が十斎日のそれぞれを割り当てられて、弁乳母には十八日の絵のところが当っていたのではあるまいか。

十さいたうの地獄のゑを人々よむに十八日つるぎに人の貫ぬかれたるを（傍点筆者）

というのは右の如く考える時その意味するところが明瞭になるであろう。してみると、「十さいたうの地獄のゑ」というのは十王地獄変相図の如きものであろうか。平安朝女流歌人の地獄絵を詠んだ作は、寺院や仏名会における公私の場で一種のゲームとして生まれているのかも分らない。

このように考えれば、彼女らの詠歌をみる時、地獄をば深刻痛切に受け取っているというよりも、むしろ遊戯的な匂いのすることをうまく説明することができよう。

赤染衛門が秤にかけられた罪人の図を見て「いとかはかりはおもはさりしを」と言ったのも多分に遊戯的誇張と言えなくもないし、和泉式部の、剣の枝に罪人が貫かれたのを見ての感想は「浅ましや」であり、弁乳母は「いかにせむ」と全く他人事のように投げ出しているし、弁乳母の、

作りこし罪を共にて知る人もなく〳〵越ゆるしでの山哉

の歌の中心は、「知る人も無く」と「泣く泣く」の意の懸詞に在ることは言うまでもあるまい。枕草子（八一段）に、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

御仏名のまたの日、地獄絵の屏風とりわたして宮に御覧ぜさせ奉らせ給ふ。ゆゆしう、いみじきことかぎりなし。「これ見よ、見よ」とおほせらるれど、「さらに見侍らじ」とて、ゆゆしさにうへやにかくれふしぬ[39]

とあるのは周知のところであるが、清女は、「ゆゆし」とだけ繰り返して、決して見ようとはしていない。むろん、清女の性癖からすれば、必ずしも額面通りには受け取れないので、「これ見よ、見よ」は宮の戯れであり、清女がそれに軽く応じてみせたといったところであろうが、それはともかく、彼女は「うへやにかくれふし」てしまった。また、栄花物語（巻三、さまゞのよろこび）にも、

十二月の十九日になりぬれば、御仏名とて、地獄絵の御屏風などとうでゝしつらふも、目とゞまりあはれなるに、折しも雪いみじう降りければ、「送り迎ふ」といひ置きたるもげにとおぼえたるに、殿上人の菩提声もあやにくなるまで聞えたり。[40]

とあるが、その感想は「あはれ」だという。栄花物語に見える仏名会に降る雪のことは拾遺集（巻四、冬の仏名の歌）に多く見え、[41] 内裏仏名会の歌詠とは別に源順集にも見えている。[42] 清女も「くちをしきもの五節・御仏名に雪降らで、雨のかきくらし降りたる」[43]と言い、源氏物語（幻の巻）でも御仏名の雪に触れている。[44]

滅罪を祈る仏名の日、折しも清浄なる純白の雪を見ることはまさに願ってもないことで、栄花物語の記事もかかる美的観点に立っているわけである。

周知のように、清少納言は枕草子（三三段）に当時の法会の実態を活写しているが、[45] まさしく、彼女

らにとって法会は一種の社交場であり、ピクニックの広場ないしは井戸端会議場であるかに見える。法会の多い日は一日に三つも四つもあって、公卿らを東奔西走せしめたのであって、院政期の公卿の日記には説経に随喜感歎したことが殆ど毎日記録されていると言ってもよい程である。[46]

今昔物語集（巻二八の七）に、教円なる者は「物可咲ク云テ人咲ハスル説教・教化ヲナムシケル」[47]学生であったとあり、宇治拾遺物語（巻五の一一）に仲胤僧都は「説法えもいはず」他の僧が真似をした話[48]を伝えているのは、いわば、法会ずれした人々を惹きつけるために、僧侶もまた苦心したことを示している。

かような美的娯楽的情況に在った王朝人が、地獄に対して未だ深刻な受け止め方をしていないのは、むしろ当然のことであったのかも分らない。かの往生要集も彼らが愛読して止まなかったのは、実に、浄土の荘厳や来迎の歓楽を叙した部分であって、道長は阿弥陀如来と五色の糸で結ばれて、ひたすら西方浄土を念じて死んで行ったし、[49]当代の往生要集の引用の多くは六道の部分には触れていないのである。

諸経典に或いは僧侶が功徳ありとして説く諸々の供養は、平安貴族たちにとっては充分実行可能であり、その供養の場に臨んでは、「有り難い浄土」を身近に感じることも出来た筈である。このような貴族たちが死後地獄に堕ちよう筈がなく、従って、地獄に恐怖する必要もなかったのであろう。彼らが来世を祈るのは、現世の満足を死後に延長せしめんとする貪欲な願望の現れに過ぎないのだと言えなくもない。

三

かような王朝貴族たちの姿とは別なところに古代末期の動乱期に漂泊の旅を続けた西行（一一一八―一一九〇）の「地獄ゑを見て」と題する一大連作があった。結論的に言えば、それは地獄の諸相をば全て自己と深く関わるものとして深刻痛切に受け止めたものであり、この期における、地獄絵に触発された文学の総決算ともすべきものである。

地獄ゑを見て[50]

①みるもうしいかにかすべき我心かゝるむくいのつみやありける
②あはれ〳〵かゝるうきめをみる〳〵はなにとてたれもよにまぎるらん
③うかるべきつひのおもひをおきながらかりそめのよにまどふはかなさ
④うけがたき人のすがたにうかみいでてこりずやたれも又しづむべき
⑤このみみしつるぎのえだにのぼれとてしもとのひしをみにたつるかな
⑥くろがねのつめのつるぎのはやきもてかたみにみをもほふるかなしさ
⑦重きいはを百尋ちひろかさねあげてくだくやなにのむくいなるらん
すなわとまうす物うちてみを破りけるところを
⑧つみ人はしでの山辺の杣木かな斧のつるぎにみをわられつゝ

⑨ひとつみをあまたにかぜのふききりてほむらになすもかなしかりけり
⑩なによりは舌ぬく苦こそかなしけれおもふことをも言はせじのはた
くろきほむらのなかにをとこ女もえけるところを
⑪なべてなきくろきほむらのくるしみはよるのおもひのむくいなるべし
⑫わきてなほあかゞねの湯のまうけこそ心にいりて身をあらふらめ
⑬塵灰にくだけはてなばさてもあらでよみがへらすることのはぞうき
⑭あはれみし乳房のこともわすれけり我かなしみの苦のみおぼえて
⑮たらちをのゆくへをわれもしらぬかなおなじほのほにむせぶらめども
こころをおこす縁たらばあびのほのほのなかにてもと申すことをおもひいでて
⑯ひまもなきほむらのなかの苦しみもこゝろおこせばさとりにぞなる
あみだのひかり願にまかせて　重業障のものをきらはず地獄をてらしたまふにより　地獄のかなへの湯清冷の池になりてはちすひらけたるところを　かきあらはせるを見て
⑰ひかりさせばさめぬかなへのゆなれどもはちすのいけになるめる物を
みかはの入道　人すゝむとてかゝれたるところに　たとひ心にいらずともおして信じならふべし　この道理をおもひいでて
⑱しれよ心おもはれねばとおもふべきことばことにてあるべきものを
⑲おろかなる心のひくにまかせてもさてさはいかにつひのおもひは

えむまの庁をいでて　罪人をぐして　ごくそつまかる　乾のかたにほむらみゆ　罪人いかなる
ほむらぞと獄卒にとふ　汝がおつべき地獄のほむらなりと獄卒の申をきゝて　罪人をのゝきか
なしむと　ちういん僧都と申しし人説法にし侍りけるをおもひいでて

⑳とふとかやなにゆゑもゆるほむらぞと君をたきぎのつみのひぞかし

㉑ゆくほどはなはのくさりにつながれておもへばかなしてかしくびかし

かくてぢごくにまかりつきて　ぢごくの門ひらかむとて　罪人をきへにすゑて　くろがねのし
もとをなげやりて　罪人にむかひて　ごくそつつまはじきをしかけていはく　このぢごくいで
しことはきのふけふのことなり　いでしをりに又かへりくまじきよしかへす〳〵をしへき　ほ
どなくかへりいりぬること　人のするにあらず　なむぢの心のなむぢを又かへしいるゝなり
人をうらむべからずと申て　あらきめよりなみだをこぼして　ぢごくのとびらをあくるおと
百千のいかづちのおとにすぎたり

㉒ここぞとてあくるとびらのおときゝていかばかりかはをのゝかるらん

さてとびらひらくはざまより　けはしきほのほあらくいで　ざい人のみにあたるおとのおびた
だしさ　申しあらはすべくもなし　ほのほにまくられて　罪人ぢごくへいりぬ　とびらたてて
つよくかためつ　ごくそつうちうなだれてかへるけしき　あらきみめには似ずあはれなり　か
なしきかなや　いついづべしとてもなくて苦をうけむことはたゞぢごく菩薩をたのみたてまつ
るべきなり　その御あはれみのみこそ　あか月ごとにほむらのなかにわけいりてかなしみをば

とぶらうたまふなれ　地獄菩薩とは地蔵の御ななり

㉓ほのほわけてとふあはれみのうれしさをおもひしらるゝ心ともがな

㉔さりともなあか月ごとのあはれみにふかきやみをもいでざらめやは

㉕くるしみにかはるちぎりのなきまゝにほのほとともにたちかへるかな

㉖すさみ〳〵南無ととなへしちぎりこそ奈落がそこの苦にかはりけれ

㉗あさひにやむすぶこほりのくはとけむむつのわをきくあか月のそら

この連作については、夙に、伊藤嘉夫氏が日本古典全書『山家集』に収める「聞書集」の頭注で、「この大連作はただに西行のといふにとどまらず短歌史上に注意すべき作品である」[51]と言われ、窪田章一郎氏も『西行の研究』の中で特に一項目を立てて論じられた[52]。次いで片野達郎氏が「西行『聞書集』の〈地獄絵を見て〉について」と題して詳細な研究を発表された[53]。

西行のこの連作の前後には、嵯峨で詠んだ「たはぶれ歌」や源平争乱期の歌群があるので、連作はおおよそこの頃のものとしてまず間違いあるまい。窪田氏はこれを次の如く整理された[54]。

序の如きもの　①～④　地獄に堕ちる人間を悲しむ歌。

第一段　⑤～⑦　等活地獄
　　⑧～⑩　黒縄地獄
　　⑪～⑮　焦熱・大焦熱地獄
　　絵の与える恐怖を主観的な詠歎の語をまじえながらも写実しようと試みている。

第二段　⑯～⑲　絵を見て思ったこと、発心のすすめとも言うべき性質のもの。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com